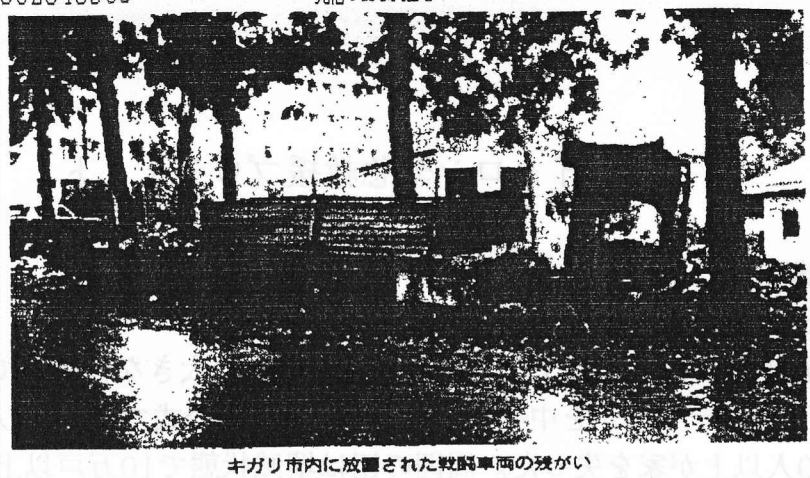

キガリ市内に放置された戦闘車両の残がい

ルワンダ救援

国際医療協力の現場から

☆1

ルワンダ難民救援では、国連の関係機関のほか各国の非政府組織（NGO）の医療チームも活発な活動を展開している。先ごろ、ルワンダの首都キガリやザイール南東部のブカブ難民キャンプを回って帰国した「ルワンダ難民救援キャンペーン」のコーディネーター・有光徳氏に、NGOの医療協力の現状を五回連載で報告してもらう。

不思議な落ち着きと静けさ

首都キガリの表情

九月上旬、ルワンダの首都キガリを訪れた。RCC（ルワンダ難民救援キャンペーン）の医療チームが活動しているザイール南東部のブカブの難民キャンプの治安が悪化し、国連から各NGO（非政府組織）に一時避難勧告が出たため、ナイロビで待機していた医師らと一緒に、ケニヤからウガンダのエンテベに飛び、さらに陸路を車で七時間走ってキガリに入った。

不安と緊張に包まれたルワンダ入りだったが、意外にも首都キガリは落ち着いていた。虐殺された遺体の数々を見ることを覚悟していたが、予想に反して市内の整備が進み、わずかに放置された戦闘車両の残がいを見るのみで、市内を警備している新政府軍兵士の表情にも緊張感はなかった。

市内の路上マーケットも再開され、商店も再開し、ホテルのレストランは食事の提供を中止していたが、町中の食堂ではジャガイモや肉、米、スパゲティをふんだんに盛り付けた通常のメニューの食事が供され、パンや野菜も買うことができた。水の供給が確保されているのに、国際級のホテルではプールに水を注ぎ、芝生の上を散水器がまわっていて、不思議な気がした。私たちがキガリに入った日にキガリ空港が再開され、サベナ航空の定期便第一便が到着した。首都キガリの機能を早く回復させて、復興のための補給基地にしたいとの国連や援助関係者の戦略にもとづいて、資金とマンパワーを集中させた結果だ。

ただし、その分インフレが進み、庶民の暮らしを苦しくしている。水道が回復するのも、あと六週間ほどかかると言われていた。何よりも目立ったのは通りを歩く人の数が少ないこと。四年前に旅行でキガリを訪れたことのある渡辺陸生医師の話でも、見かける人の数が四分の一くらいに減ったとさがただよっていた。

七月の停戦から約一カ月半。二週間ほど前から本格的に事業を開始したWHO（世界保健機関）やユニセフの責任者たちは意欲満々だった。新政権も体制を徐々に整えつつあり、海外からの援助団体を管轄する窓口も復興省（MOR）に一本化されている。水道や電気、道路などのインフラの回復に全力を挙げているが、目下一番心配されているのが、農作物の種の植え付けができないことだ。種を植える人手がない、農具もない。すでに雨期は始まっている。

WFP（世界食糧計画）とFAO（国連食糧農業機関）の予測では今後五カ月にわたってルワンダ国内の二百五十万人が深刻な食糧不足に直面するとされている。現在国内の各キャンプの栄養失調児の割合は五～一〇％だが、端境期の十、十一月にこの数字はさらに悪化すると予想されている。そして、来年はもっと深刻な飢饉（ききん）に見舞われる可能性が高い。特に依然混乱の続いている南西部での状況が憂慮される。赤十字やWFPなどは食糧や種、農具を飛行機でピストン輸送しているが、事態は予断を許さない。

種の植え付けできずに 深刻な飢饉の可能性も

言う。実際、国連の推計でもこの五カ月間で七百九十万人いた国民のうち、百万人が虐殺され、四百五十万人が内外で難民化しているのだから、減り方はそんなものなのだろう。国連やMSF（国境なき医師団）の旗を立てた車が走り回っている街には、不思議な安

ルワンダ難民救援キャンペーン
ケニヤ・ナイロビ
有光 健

上手に役割分担を行い さながら"援助のオリンピック"

NGOも国際分業

な分野で力を発揮

ルワンダ難民救援キャンペーン ペリコ・ロードスター 有光 健

ンプに既に四十二万人が滞在し、後から出てきた人たちはもう行く場所がない。住居なく雨で森の中の木に寄っているらしい。

この島まで出掛けて道路の修理をしたり、電気の工事をしているのが欧米最大手のNGOのひとつCARE（ケア）のドイツ・チーム。技術者ばかりでなく、救急車まで持ち込んで医療活動もしている。

医療チームで何といっても自立つのがMSF（国境なき医師団）。フランス・チームが来ている。難民キャンプの約半分を担当し、赤十字をしのぐスタッフを送り込んでいる。MSFの旗を立てた車やトラックを街中至る所で見掛ける。

ICRC（国際赤十字委員会）やSCF（セイブ・ザ・チルドレン）も世界中の難民キャンプで活動しているNGOだ。コンボイを連らねて大々的に食糧の搬入をやっているのが米国のキリスト教系のNGO「ワールド・ビジョン」。安全な水の供給に人材と資財を送り込んでいるのが、英国の最大手「オクスファム」（OXFAM）。アイルランドのNGO「コンサーン」（CONCERN）もキャンプで活発に動いている。

日本ではMSFばかりが有名だが、「国境なき薬剤師団」（PSF）も数少ない一緒に現場にやって来て、薬の供給を担当している。医薬品の補給なしに医師・看護婦だけでは医療活動は成立しない。日本のRCC（ルワンダ難民救援キャンペーン）の医療チームもPSFから薬を分けてもらっている。

「国境なき……」はいまや欧米では普遍的な人権擁護・人道援助活動へのキーワードになっていて、今回ブカブ滞在中に「国境なき記者団」の取材も受けた。スイスからテレコをかついでやって来た記者は、三週間たっぷりと、ルワンダ、ザイールを取材し、ラジオ局にニュースを送っているという。

今回初めて出会ったユニークなチームが、アイルランドからやって来た「ゴール」（GOAL）というNGO。死体の処理・埋葬とトイレづくりが専門で、黒のTシャツがユニフォームという異色のNGOだ。

イタリアからも小さなNGOの医師団が来ていたし、米国ボストンに本部のある「人権のための医師団」は直接的な救援活動より、医療面から虐殺の検証をし、報告書を出して国際的にアピールすることを主要な任務にしている。

実に多様なNGOが各国から駆けつけ、協力したり、競争したりしながら人道援助活動に従事している。こうした世界中のNGOがゴマに約六十、ブカブに約三十も既に来ていて、現場はさながら"援助のオリンピック"だと評する人もいる。

日本からザイールの難民キャンプに来ているのはRCCとAMDA（アジア医師連絡協議会）の二組織だけだが、現場で闘われているのは、日の丸を立てることではなく、各国のNGOと協調・協力して、上手に分担を行い、いかに効果的にできるかだ。そのためには、語学力も交渉能力も必要で、医療スタッフ以上に現地コーディネーターの役割が大きい。NGOの援助もいまや国際分業の時代なのである。

難民キャンプの子どもたちの診療をする渡辺医師
医師(ジョ)ーパンゾー・キャンプ子ども診療所で

ルワンダ救援

国際医療協力の現場から

☆3

欧米に比べ貧弱な装備

バックアップ体制の確立が急務

日本のNGO

ルワンダ難民救援センター 有光 健

欧米のNGO（非政府組織）に比べて日本のNGOはどうなのか？　といつも問われる。

今回私たちRCC（ルワンダ難民救援キャンペーン）が派遣したスタッフは一カ月半で十人。フィリピン・ピナツボ火山被災地で救援活動に参加した経験や中国での医療の経験のある医師二人とコーディネーター、ロジスティシャン各一人の計四人を第一陣として現地に派遣した。

募集開始から派遣まで約二週間というのは比較的早かったと思うが、MSF（国境なき医師団）のように世界中どこへでも四十八時間から七十二時間以内にという迅速（じんそく）さにはほど遠い。

ロジスティシャンも、日本では聞きなれない言葉だが、重要な仕事だ。医師が入る前に、あるいは同時に、活動する場所を確保し、テントを張り、車を調達し、宿舎を設営し、物資の補給路を開拓・確保する。「物資管理員」というようにいわれる要員だが、ロジなしに援助活動は成立しないと断言してもよいくらいだ。

第二陣は、アフガン難民キャンプやカンボジアでの経験を持つ医師と沖縄の米軍病院に勤務し、旅行でアフリカには何度も来ている研修医の医師二人とコーディネーターの三人。

第三陣は、チュニジア、エチオピア、タイ、カンボジアでの経験を積んだ青年協力隊OBの医師と臨床検査技師、仏語の堪能（たんのう）な調査員の三人、という布陣だ。

医療チームとしては最低限の陣容だ。看護婦は、患者とのコミュニケーションの問題があるので現地の人を雇うことにした。

第一陣が成田を出発した八月十一日の時点で、任地ははっきりと決まってはいなかった。どこが一番適当かも自分たちで調べて決めることになった。

四人のスタッフが、東京から持参した医療器具と二人、東京とナイロビで購入した医薬品を携えてチャーターした小型機でブカブの空港に降り立ったのは八月十八日、難民の大量流出から五日目だった。

道路の反対側からはわずかな家財道具をかついで国境から歩いてくる難民の群れが続き、一気に人口が倍に膨れ上がったブカブの街はパニックに陥っていた。ホテルも取材記者と援助関係者らで満員だった。現場は悪戦苦闘だった。欧米のNGOは大挙してやって来るので、車輌や資材も豊富だ。それに比べて日本チームは装備は貧弱で、日本との電話連絡にも骨が折れる。特に電話や電気の完備していないアフリカでは、まず必要なのは、インマルサットという衛星電話設備だ。一式で三百万円もするが、治安面での情報なども現地では入手しにくいので、インマルなしに今回のプロジェクトはできないと、私はあちこち駆け回り、郵政省国際ボランティア貯金の助成を待、やっと一式購入してもらった。

しかし、いつも思うのだが、こうした現場で使う通信機や、コピー、FAXはほとんどが日本製だ。パソコンやプリンター、発電機も日本製が多く、国産も各NGOもトヨタの四輪駆動車を使っている。援助の現場で日本の顔が見えないとよく言われるが、日本からの物はあふれている。むしろ、こうした車や機械の保持やサポートができる民間企業の人材をもっと出したらどうだろうか？　援助活動のポイントのひとつは、もっとも専門的な分野のことを素早くやってのけることである。そうすれば、国際的にも評価されやすい。ちなみにドイツのダイムラー・ベンツ社はルワンダ難民救援に社員二十人を交代で派遣中だ。

ロ歳児から老婦人まで18人もの家族が一つのテントの中で暮らしている。左はザイール軍医、右は日本人コーディネーター後町直子さん（バンジー・キャンプで）

ルワンダ救援

国際医療協力の現場から

☆4

隣国民の受難 分かち合う

受入れ国ザイール

根深い西洋人への反発 植民地支配の負の歴史も

ルワンダ難民救援キャンペーン・コーディネーター 有光 健

約二百万人の難民を受け入れているザイールも大変だ。モブツ大統領への批判も多く、こちらも政権は不安定といわれる。国境や難民キャンプを管理するザイール軍の兵士の給料も数カ月支払われないとかで、どこに行っても〝袖の下〟を要求される。顔は実にわずかなのだが、正義感に燃えて拒否するといろいろと嫌がらせを受ける。時間のロスを避けたいので、少額を支払ってスムーズに通してもらうのだが、いつもわだかまりは残る。不必要な金を取られて悔しいという以上に、アフリカ諸国の経済的自立の困難さを実感させられるのだ。

植民地支配の負の歴史は、アジア以上に深刻かも知れない。ルワンダ人、ザイール人には、助けてもらいたい、外国援助機関の仕事にありつきたいと望む気持ちが一般には多い半面、西洋人に対する反発も根深い。いくつかの難民キャンプでは、フランス人やベルギー人の援助チームと難民とが対立し、ヨーロッパ勢が被害者と糾弾なくさせられたケースがある。一代わりに歴史的に中立だった日本の援助チームにやってほしい」との依頼を国連から毎回も受けた。もともと今回のルワンダの紛争もこの地域一帯で長年続く混乱も、植民地支配の歴史に由来するところが大きい。

旧宗主国のフランスやベルギーが多数派のフツ族をうまく支配するために少数派のツチ族を意図的に優遇し、中間管理職に仕立て上げて民族対立を煽ってきた。その結果醸成された両民族の歴史的な相互不信と憎悪は、簡単には癒やし難い。それにしても、ザイール側住民もこの突然の難民をよく受け入れていると思う。ブカブの町の人口と同じくらいの難民が押し寄せて、市内の学校の校庭はテント村と化し、ずっと休校のままだ。難民が炊事に使う燃料に木をどんどん切ってしまったため、あっという間に市内の街路樹はあらかたなくなってしまった。

これまでカンボジア難民を受け入れたタイやロヒンギャ難民を受け入れたバングラデシュでは、必ず地元住民による反発と抗議が起き、難民をキャンプの囲いの中に封じ込め、木を切ると処罰するなどの厳しい対応が受け入れ国側では行われてきたが、ザイールではそうした扱いを受けてない。キャンプを管理しているザイール軍の軍医は、アフリカ人の寛大さと兄弟意識を強調したが、社会全体がルーズだというだけでなく、隣国の住民の受難を分かち合うというアフリカ的ヒューマニズムの土壌も確かにあるようだ。

今回の紛争以前にルワンダからザイールに来て住みついているルワンダ人も多く、難民キャンプだけでなく、そうした親族の所に身を寄せている難民も少なくない。RCCが難民キャンプの他に担当している二つの地元の診療所のまわりには、親族などの家に住みついている難民がそれぞれ八千人もいる。個人主義、効率主義だけで動いている社会であれば、とてもこれだけの難民を受け入れて、穏やかに市民生活を続けてはいられないのではないかとも感じた。

ザイール人の地元のNGOも実によく働いている。山奥の診療所でも、やって来る難民の患者を地元の住民と分け隔てなく受け入れている。難民の約一割が回復を妨されたり、逃げる途中で親とはぐれたり、捨てられた〝孤児〟で、その数は二千人以上と推定されているが、「孤児センター」にやって来てルワンダ人の子どもを引き取るザイール人の「養父母」もかなりの数にのぼっていると聞く。

難民キャンプで配布された食糧やRCCの医師が与えた飴玉を子ども同士で分け合ったり、兄弟で均等に配布する場面もしばしば見かけた。ザイール兵と難民の小ぜり合いといったトゲトゲしいニュースばかりが新聞紙上をにぎわせているが、アフリカ的大家族主義の伝統に支えられた感動的な光景にも救援チームは毎日出会っているのである。

ブカブのバンジー・キャンプの難民の子どもたち と難民救援専門看護師 ⑤

ルワンダ救援

国際医療協力の現場から

☆5

「人権侵害」と「人道」の狭間で

NGO活動の課題

こうした難民救援に参加して私たちが提供できるのは、限られた医療と人道的なケアにすぎないが、同時に、参加した者はいつも多くを学んで帰って来る。

今回のルワンダ難民救援活動の難しさは、支援対象の難民が自然災害ではなく、政治的・軍事的紛争によって生み出された難民であるという点に尽きる。国連も各NGOも難民の早期帰還を望んでいるが、いつ難民が帰還できて、救援活動が終結することになるのか？　だれにも分からない。従って、救援事業の計画も立てにくく、予算も一体いくらかかるのか？　予測不可能である。

しかも、支援対象の難民の中には大量虐殺の責任者や実行者が多数まざっている。「人権」を優先した可能性の高い集団を「人道援助」の名の下に救援しなければならない。RCC（ルワンダ難民救援キャンペーン）が活動しているバンジー・キャンプは特に旧政府軍の兵士が多く、政治的中立を原則にする国連はこのキャンプへの支援を行っていない。現在WFP（世界食糧計画）が食糧を供給していない唯一のキャンプで、NGOだけが支援している。

タイ国境のカンボジア難民キャンプでは、「普通」の難民はUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が支援したが、ポルポト派やソン・サン、シアヌーク派の兵士もいるミリタリー・キャンプはUNHCRは援助を行わず、代わりに国連事務総長の下にUNBRO（国連国境救援活動）という別の機関を設置し、人道援助を行った。赤十字の例を引くまでもなく、敵であろうが味方であろうが、困っている人は支援するというのが「人道援助」の基本である。例えば父親が人殺しであったとしても、食べ物のない子どもは助けなければならない。日本も批准した「子どもの権利条約」は、内戦下の子どもの保護についても細かく規定している。簡単に好きとか嫌いとか、怖いとかの理由で、計画や活動を勝手に変更することはできない。あくまで世界的な基準に基づいて、ニーズがあるから出かけ、淡々と責任を果たすのが「人道援助」である。

敵、味方の区別なく困っている人を助けるのが基本

ルワンダ難民救援キャンペーン　有光　健

フツ族の旧政府軍が多いという理由で民込みする他のスタッフにベテランの小児科医藤愛方里子医師はこう叫んだ。「医者の仕事は世界中どこでも同じ。目の前にいる患者を手当てし、可能な限りの処置をしてあげるだけ。キャンプが怖いという人は来なくてもいい。私は行きます」と。

こうした思想的、原理的な問題から、技術的なノウハウや高度・文化の問題まで、今、アフリカの地でルワンダ難民を支援しながら日本のNGOは多くを学んでいる。七〇年代後半のカンボジア難民救援で始まったとされる日本のNGOによる緊急救援活動は、アフガン、エチオピアやクルドの難民救援、ピナツボ火山噴火などの自然災害の救援を次々体験して、着実に成長してきている。今回初めてインマルサット（衛星電話回線）を設備し、独自にチャーター便を飛ばして救援物資やスタッフを輸送するという従来では考えられなかった規模の作戦を展開している。

自衛隊派遣にばかり目が向いているが、はるかに少ない予算と人員で苦労しながら早くから現地で活動を続けているNGOの試行錯誤にもぜひ注目し、その貴重な成果を分かち合っていただきたい。さらにNGOの活動に対するバックアップも、思いつきでなく政策化してほしい。例えば、現状ではインマルサットやランドクルーザーを購入した資金はNGOやトヨタに還流し、その分医薬品や食糧購入に充てられる予算が削られている。こうした高額の器材や車輌などは政府が無償で貸し出すというようなサービスを制度化できないだろうか？　対象は日本のNGOに限定する必要はない。

東京やニューヨーク、ジュネーブから一方的に発想するのでなく、ニーズのある現場から発想・計画することが「国際化」の実現のためにぜひとも必要である。各位の一層の理解と協力を要望して本稿を終える。

（おわり）

※ルワンダ難民救援募金の送金方法は、住友銀行新宿支店（普通口座一七一三三五一「ルワンダ難民救援金」、郵便振替口座〇〇一三〇一九一七七〇八四三「同」へ。「ルワンダ難民救援キャンペーン」の連絡先は、〒102 千代田区飯田橋四ノ五ノ一六 エル千代田四〇二 ☎03・3268・8591